

Asia Indicators

発表日: 2025 年6月 13 日(金)

インド・5月インフレは+2.82%と約6年ぶり低水準 (Asia Weekly(6/9~6/13))

～台湾・5月輸出額はトランプ関税延期も追い風に、単月ベースで過去最高を更新～

第一生命経済研究所 経済調査部

主席エコノミスト 西濱 徹 (TEL: 050-5474-7495)

○経済指標の振り返り

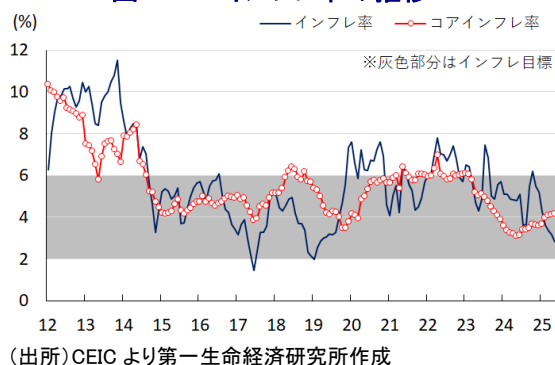
発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
6/9(月)	(中国)5月消費者物価(前年比)	▲0.1%	▲0.2%	▲0.1%
	5月生産者物価(前年比)	▲3.3%	▲3.2%	▲2.7%
	5月輸出(前年比)	+4.8%	+5.0%	+8.1%
	5月輸入(前年比)	▲3.4%	▲0.9%	▲0.2%
	(台湾)5月輸出(前年比)	+38.6%	+25.0%	+29.9%
	5月輸入(前年比)	+25.0%	+30.2%	+33.0%
6/11(水)	(韓国)5月失業率(季調済)	2.7%	--	2.7%
	(マレーシア)4月鉱工業生産(前年比)	+2.7%	+3.0%	+3.2%
6/12(木)	(インド)5月消費者物価(前年比)	+2.82%	+3.00%	+3.16%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

【インド】～食料インフレの後退でインフレ率は4ヶ月連続で目標を下回るも、コアインフレ率は緩やかに加速～

12日に発表された5月の消費者物価は前年同月比+2.82%となり、前月(同+3.16%)から一段と鈍化して4ヶ月連続で中銀(インド準備銀行)の定めるインフレ目標(4±2%)の中央値を下回るとともに、2019年2月以来となる伸びとなっている。前月比も+0.21%と前月(同+0.31%)から上昇ペースは鈍化しており、生鮮品や穀物をはじめとする食料品価格は下落基調が続いており、生活必需品を中心にインフレ圧力が後退していることが影響している。なお、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+4.17%と前月(同+4.17%)から緩やかに伸びが加速しており、3ヶ月連続でインフレ目標の中央値を上回るとともに、2013年10月以来の伸びとなっている。ただし、前月比は+0.29%と前月(同+0.59%)から上昇ペースは鈍化しており、国際原油価格は上値の重い展開が続くも、エネルギー価格の上昇を反映して輸送コストが押し上げられるとともに、国際金融市場における通貨ルピー安圧力がくすぶるなかで輸入物価も押し上げられており、幅広く財価格に上昇圧力がくすぶるほか、サービス物価にも上昇圧力がくすぶるなど、全般的にインフレ圧力が高まっている様子がうかがえる。

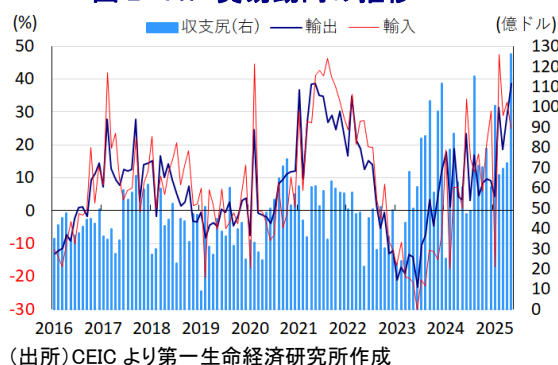
図1 IN インフレ率の推移



[台湾]～トランプ関税の上乗せ分延期も追い風に輸出は幅広く底入れ、単月ベースの輸出額は過去最高に～

9日に発表された5月の輸出額は前年同月比+38.6%となり、前月（同+29.9%）から一段と伸びが加速している。前月比も+3.7%と前月（同+2.1%）から3ヶ月連続で拡大しており、中期的な基調も拡大傾向で推移するなど底入れの動きを強めるとともに、単月ベースの輸出額も過去最高を更新している。財別では、主力の輸出財である半導体など電子部品関連や電気機械関連をはじめとする幅広い分野で輸出が底入れの動きを強めている。国・地域別でも、最大の輸出相手である中国本土向けに底打ち感が出ているほか、米国向けや日本向け、ASEANをはじめとするアジア新興国向けなどで大幅に拡大する動きがみられる。いわゆる『トランプ関税』の上乗せ分の延期により最悪の事態が回避されていることに加え、中国本土以外の国・地域向けの輸出を活発化させていることも輸出全体を押し上げている。一方の輸入額は前年同月比+25.0%となり、前月（同+33.0%）から伸びが鈍化している。前月比も▲8.5%と前月（同+1.7%）から4ヶ月ぶりの減少に転じており、底入れの動きに一服感が出ている。トランプ関税の発動を前にした輸出の駆け込みを反映した素材・部材など原材料の輸入拡大の動きに一服感が出ているほか、景気の先行き不透明感の高まりも輸入の重石となっている様子がうかがえる。結果、貿易収支は+126.15億ドルと前月（+72.08億ドル）から黒字幅が拡大しており、単月ベースの黒字幅も過去最大となっている。

図2 TW 貿易動向の推移

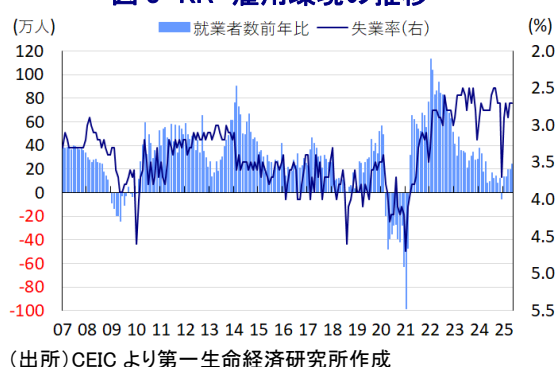


[韓国]～失業率は横這いで推移も、雇用環境の悪化を受けて若年層などで労働市場からの退出の動きも～

11日に発表された5月の失業率（季調済）は2.7%となり、前月（2.7%）から2ヶ月連続の横這いで推移している。失業者数は前月比▲0.6万人と前月（同▲4.9万人）から2ヶ月連続で減少しており、年

代別でも、60代以上の高齢層を中心に拡大している一方、10代や20代といった若年層や30代などで減少する動きが確認されている。一方の雇用者数は前月比▲4.4万人と前月（同+4.8万人）から2ヶ月ぶりの減少に転じるなど一進一退の動きをみせており、年代別では60代以上の高齢層のほか、20代や30代で減少する動きがみられる一方、10代のほか、40代や50代などで減少するなど、ばらつきが生じている。雇用形態別でも、正規雇用に底堅い動きはみられるものの、非正規雇用を中心に調整圧力が強まっている様子が見え始める。さらに、こうした雇用を取り巻く環境の不透明感の高まりを反映して労働力人口は前月比▲0.5万人と前月（同▲0.0万人）から2ヶ月連続で減少しており、10代や50代といった年代で減少するなど、労働市場からの退出が強まる動きもみられるほか、労働参加率は64.7%と前月（64.8%）から0.1pt低下している。

図3 KR 雇用環境の推移



[マレーシア]～製造業は拡大の一方で鉱業の鈍化が生産全体の重石に、経済活動全般には不透明感が残る～

11日に発表された4月の鉱工業生産は前年同月比+2.7%となり、前月（同+3.2%）から伸びが鈍化している。前月比も▲0.21%と前月（同+1.76%）から2ヶ月ぶりの減少に転じるなど一進一退の動きをみせているものの、中期的な基調は拡大傾向で推移するなど底堅さを維持している。分野別では、前月に大きく上振れした鉱業部門の生産が前月比▲6.83%と2ヶ月ぶりの減少に転じるなど、生産全体を下押しする一方、製造業の生産は同+1.48%と2ヶ月ぶりの拡大に転じるなど対照的な動きをみせている。製造業のなかでは、主力の輸出財である半導体をはじめとする電子部品関連や電気機械関連の生産は堅調な動きをみせるとともに、自動車をはじめとする輸送用機械関連の生産も底打ちするなど、幅広い分野で生産を取り巻く環境は改善しており、米トランプ政権による相互関税の上乗せ分延期により外需を取り巻く環境の悪化が回避されたことが影響している。ただし、経済活動に連動する傾向がある発電量は前月比+0.02%と2ヶ月ぶりの拡大に転じているものの、中期的な基調は減少傾向で推移するなど力強さを欠く動きが続いており、マクロ経済全体に不透明感がくすぶっている様子が見え始める。

図 4 MY 鉱工業生産の推移



以 上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。